

麦青きふるさと

矢島祐利

戦後歌集

寒鮒

ふるさとの母がたびたる粟餅をともしみ喰らふ吾と妻子と(1946-1 アフリカ四月号)

ふるさとの越名(こへな)の沼の寒鮒を食ひつつ思ふ赤彦先生(1946-2 同右)

生ひ立ちの此の国土(くに)は狭くとも楽しく生くる道はあるべし(1946-3 同右)

帰り来てふるさとの山親しけれ紅葉は過ぎしあらくさの色(1946-4 同右)

木枯しは今日もひねもす吹きにけり幼きときもかくてありし(1946-5 同右)

西風の吹きすさぶ夜を老いし母と雑炊を食ふ幾年ぶりぞ(1946-6 同右)

つつがなく帰り来しかば老い母は吾の背中を洗ひたまへり(1946-7 同右)

京城に置いて来にける本のことと思ふもあはれ夜半に目覚めて(1946-8 同右)

机を置く場所

引き揚げの吾の願ひは多からず机を置かむ一坪の場所(1947-1 アフリカ三月号)

五味保義君

此の口ごる時間を売りて勤むると吾が言ひしとき友笑ひにき(1947-2 同右)

G H Q 勤務

ほかほかとステイム通る部屋にゐて心足れりといふにはあらず(1947-3 同右)

外国の言葉ひびくを気にもせず吾の席にてほしのままあり(1947-4 同右)

此の口ごるのが楽しみは午すぎで外の空気を吸ひに行くべし(1947-5 同右)

勤めびとぞろぞろ歩くひるどきを吾も混じりてそぐはぬ如し(1947-6 同右)

或るときは電車に乗りて古本を見に行くこともあり午の休みに(1947-7 同右)

時間のことやかましく言ふも尤もなれど夕べは早く帰りたく思ふ(1947-8 同右)

腹へりて吾があるときに山川の清きに遊ぶ心湧きたり(1947-9 同右)

助手安部讓治君を悲しむ(一)

ミンダナオ島スリカナといふを地図に見つ戦(いくさ)の様は思ふよすがなし(1947・10 アララギ八月号)
亡骸は如何になりけむ「靈體」などのまやかしものは焼きも棄てなむ(1947・11 同右)
貰ひたるこぶしの花を供へむに君が写真の一枚もなし(1947・12 同右)
すなほなる君なりしかば吾と共に朝鮮に行きて働きにけり(1947・13 同右)
朝鮮より南方に行きて還らねばその父のため吾は悲しむ(1947・14 同右)
出で立ちの前夜なりきおそくなり吾の家にて髪刈りてやりき(1947・15 同右)

助手安部讓治君を悲しむ(二)

みちのくより君が忌明の茶を貰ひ朝夕する君を偲びて(1947・16 アララギ八月号)
真面目なる青年なりき大学には入りたき望みかなへてやりたかりき(1947・17 同右)
吾と共に調べし事も中途にて再び行きつひに還らず(1947・18 同右)
わが心慰みかねつ藤の花咲きたる頃と園に入りつ(1947・19 同右)
六月のくもりつづけば幼な子の疫痢に逝きし年を思ふも(1947・20 同右)
おもかげは十とせの今も軽々と膝に抱きし六歳にして(1947・21 同右)

麦青きふるさと

下つ毛は吾のふるさと麦青く雲雀あがれる頃かも今は(1947・22 ケノクニ六月号)
道のべに白き花卉の散り敷くに仰ぎてみたりこぶしの大木(1947・23 同右)
しらじらと野末の村に咲く花は李の花か薄青くして(1947・24 同右)
さくらばな松の木の間にさく見れば狭く汚きに日本おもほゆ(1947・25 同右)
引揚げて来し国土にふたたびを桜の咲ける時になりけり(1947・26 同右)

木犀の花

狭き家にこたごたとして棲み居れど木犀咲けば季節を感ず(1948・1 八雲二月号)

勤めより疲れて帰る夕暮は木犀の香も心しむもの (1948-2 同右)

明かりつかぬ家にかへり来て木犀の香に立ち来ればわれは休らふ (1948-3 同右)

買ひし本貰ひし本のようやくにニメートルばかりになりけり (1948-4 同右)

明日は何を食はずにやあらむ夜ふけて厨に妻はひとりごちつ (1948-5 同右)

志津の原

夏休みどこにも行かぬ児らを連れ秋草花の野に遊ばしむ (1948-6 同右)

子供らはオーケーなどと直ぐに言ふ此の移り行きも見過し難し (1948-7 同右)

此の原は練兵場の跡なれば人も見なくに秋更けむとす (1948-8 同右)

広原の中に小さき家立つは引揚びとの飯屋なるらし (1948-9 同右)

子らがきく草花の名をわれ知らずただ秋草と言ふべかりけり (1948-10 同右)

関東水害

出水は家に到らずとたより来ぬ汽車たえしより思ひきわれは (1948-11 同右)

渡良瀬に近ければ思ひき我が家に老いし母あり水やつきしと (1948-12 同右)

明治四三年なりきわが村もいたく水つき苦しみにけり (1948-13 同右)

電車より見て通る水つきし家のさまあはれとや言はむ原始とや言はむ (1948-14 同右)

閘門を調節して水防ぐ国もありいたく自然にすなほなる国もあり (1948-15 同右)

九十九里、東良見

打ち寄せる波の形のvari行くとつしあれば吾は飽かなく (1948-16 マララギ三月号)

拾ひ来る貝の種類も尽きたれば松の林に歩みて行かむ (1948-17 同右)

望楼は用なくなりて立ちにけり光しみに寂しき冬浜 (1948-18 同右)

此の浜に事やあらむと騒ぎにし思ひも遠く海の静けし (1948-19 同右)

春の風

はしげやし甲斐の国より訪ね来し亡き子の友の乙女となりて (1948-20 マララギ六月号)

映画館出で来しときに雨となり春かみなりのとどろきにけり（1948-21 同右）
 花すぎて静かになれる桜土手行きつつ思ふ過ぎにしものを（1948-22 同右）
 わが机幾とせぶりに置くならむ煙草を吸ひて夜を更かしめる（1948-23 同右）
 春の風硝子戸ゆすり一と日吹けど机を置けば心落ち着く（1948-24 同右）

諏訪の湖へ

朝の飯すめば仕事につかむとすかなしき夢をゆつべ見つれど（1949-1 同右）
 信濃路はまだ寒からむ蓼科や諏訪の湖べをわれは思ふも（1949-2 同右）
 湖への墓にしばらく参らぬを思ひつつ居り忌日近づき（1949-3 同右）
 三とせ余りに六たび所を易へて住む此処にいつまで在りと思へや（1949-4 同右）
 をきならはいささかの土を耕してくさぐさの種子を蒔きてみるはや（1948-5 同右）

諏訪の湯

逝きし子の忌日近づく梅雨ぐもり心重たき時は巡り来（1948-6 アララギ十一月号）

八月二十七日諏訪行き

思ひぬしみ墓べに来て心したし湖を見下ろすおくつきどころ（1948-7 同右）
 葬りの日湖のかがやき眼に沁みし思ひかへり来湖を見ければ（1948-8 同右）
 葬り果てて諸共に浴みし諏訪の湯に子供をつれて今日を来にけり（1948-9 同右）
 豊平の追悼歌会にもろびとと撮りし写真も失ひにけり（1948-10 同右）

渡欧

バルコンに吹き入る風の涼しくてマニラの朝に果汁をたたふ（1951-1 アララギ九月号）
 飛行機の中になむりて目さむればシリアの国に朝の日射せり（1951-2 同右）
 アルプスもしまらくにして過ぎしかば緑傾くスイスの草原（1951-3 同右）
 アムステルダム美術館（一九五〇年渡欧中の日記から）
 マドンナはいくたりの人描きにけむやさしきかなやフラ・アンジェリコ

(一九五一・四右一首「オランダ日記」 図書新聞一月十日)

昭和二十五年八月十一日空路ヨーロッパに向かふ

たたかひの映画思はず香港の土あらはなる山肌を見つ (1951・5)

空の中は印度の国も涼しかり低くぞ見ゆる白き綿雲 (1951・6)

カルカッタ

スコールの過ぎしばかりの飛行場に印度の人の草刈りて居り (1951・7)

色黒きこの国人の親しけれねもころにわれに食をすすむる (1951・8)

カラチ

夜深く降り立ちて入る休みどころ蠅を追ひつつ熱き茶を呑む (1951・9)

地中海

遠き島は雲かとまがふこの形容は平凡なれど現実にして (1951・10)

ここにして古き歴史を思ほゆるギリシアの方にたなびける雲 (1951・11)

ひるいひにマカロニあればやがて着くローマの国のおもほゆるかな (1951・12)

イタリアのローマの街の石だたみ坂多くして長崎おもほゆ (1951・13)

イタリアは松の木がありしかすがに日本の松と少したがへり (1951・14)

アルプスを越ゆ

谷あひに雪のつもれる山ありて険しき峰のつらなるを見ゆ (1951・15)

目の下に青き湖美しきスイスの国の青きみずうみ (1951・16)

示さるる鋭き山はマッターホーンたちまちにして遠のきにけり (1951・17)

アルプスもしまらくにして過ぎしかば緑傾くスイスの草原 (1951・18)

山を過ぎて高度下がれば草原に遊ぶ畜群の動くさへ見ゆ (1951・19)

屋根あかき家まばらなるは牧舎ならむ青々として広きアルプス (1951・20)

ローマ所見

酒を呑み肉食をする西洋僧脂ぎりたる顔をしてをり（1951-21）

何故に発心したる尼ならむ美しき瞳に美しき声（1951-22）

カムボ・デイ・フィオーレ

そのかみに君が焚かれし跡どころ花の広場にわれは来にけり（1951-23）

長き空白ありて

豊後雑詠

日出の海見おろす山の中どころ帆足万里のおくつきに詣づ（1980-1 マナラギ二月号）

大正十五年万里全集出でしとき買ひたかりしが能はざりけり（1980-2 同右）

二子山今日ぞ見にけり古くより名のみは知りしくにさきの山（1980-3）

三浦梅園帆足万里のくになればわれは豊後を親しく思ふも（1980-4 同前）

里吉は万里の幼名にして

梅園は里吉の師のまた師にて二人はつひに相みざるらし（1980-5）

日出の海あるひは函たん（）の海といふ城下鯿はこの名物（1980-6）

君が家にふたび宿りかたんたんの鯿食はむとわが思はなくに（1980-7）

五月十三日雨降りしかば伴はれ府内の町に本をあさりき（1980-8 同前）

アルメイダ遠く来りてつとめしをこの国人は書きて残さず（1980-9 同右）

思出は昨日のごとくあざやけきいく子の髪に白きもの見ゆ（1980-10）

思い出

この日ごろまなこいたはり多く読まず古きことなど思ひ出し居し（1980-11）

われ若く読者軽視といぶかりし即興詩人の文字の大きさを（1980-12 マナラギ四月号）

母のため四号活字使はせし鷗外の心いくらか理解せり（1980-13 同右）

長崎に三たび来たりて今日は見る原爆ののちに栄ゆるさまを（1980-14）

三浦梅園長崎に来て動揺せり通詞が語る地動の説に（1980-15 同前）
 梅園は二度長崎に來たりしが地動の説は二度目にききし（1980-16）
 赤水を汽車過ぐるとき思ひ出づ阿蘇のふもとに夏安居ありき（1980-17）
 安居会終りのときに追ひつきて土屋先生に笑はれにけり（1980-18）
 思出は心の中に保つもの言に出だして悔ゆることあり（1980-19 同前）
 デュヴィヴィエはこの心境を描きたりカルネ・ドウ・バル即舞会の手帳（1980-20）

白鷺

わが庭の氷れる池に下り立ちし白鷺はすぐに飛び去りにけり（1980-21 マララギ五月号）
 あの鷺は水呑みに來しかさにあらし夏に金魚をねらひし奴らし（1980-22 同右）
 空とびて池の金魚を見つけたる鷺の眼力ともしきまでに（1980-23）
 日の暮はまなこ疲れてしはだたき植木を友とするにもあらず（1980-24 同右）
 十とせ前写生に行きし思ひ出し黒生の海を見たくなりたり（1980-25）
 海原の遠くを見るぞ樂しけれまなこ休まり肩もほぐる（1980-26）
 雲と波ながめて居れば飽かずかも形も色もその都度あたらし（1980-27）
 二階より海を描かんと宿求め一人は泊めぬとことわれけり（1980-28）
 まひるより宴会をする海の宿いかなる人を泊めるつもりか（1980-29）
 人居らぬ冬の浜辺に佇みて波の形を記憶にとどむ（1980-30）

四月六日千葉アララギ歌会詠草

オリンピックはショーかサーカスカかわれ知らずアテナイ人は何と見るらむ（1980-31）
 いにしへにオリンピアの野を走りしは金のメダルのためにはあらず（1980-32）

右詠草のための草稿のうち一首

民族の祭典といふはいまだよしデモンストレーションははき違へなり（1980-33）

偶感

夢にだに忘れぬ人もあらなくいまはの際に誰が名呼ぶらむ（1980-34）

三男と

「この奥に浅間あるべしさつき雨」俳句にしても無理かも知れぬ（1980-35 アララギ八月号）

落葉松の芽ぶきけぶりて降る雨に小鳥の声も今日は聞こえず（1980-36 同右）

この宿に鳥の録音ありといへどテープを聞くは学習のことし（1980-37）

この湯に夏を過ごせし人ありてすでに久しと思ふばかりに（1980-38）

雨晴れし鬼押出しの岩の土地質をまねぶおのが子と居り（1980-39 同前）

サラディンはイスラムなれば十字架のフランクビとと戦ひにけり（1980-40 同右）

戦争は好む所にあらずともスルトンなればあはれサラディン（1980-41 同右）

パレスチナ十字軍より取返しマドラサなどを作らせにけり（1980-42）

マドラサは西洋ならばコレジオにてイスラム学の殿堂なり（1980-43）

スコットのタリスマン読みしは震災前イスラムのことは余り知らざりき（1980-44）

一九八〇年一月二六日岡山県玉島円通寺なる田代芳郎の墓に詣る

戒名は要らぬと言ひし君が墓ひそけくありぬこのみ寺に（1981-1 アララギ二月号）

田代芳郎アララギにては村松芳郎むらまつは君がふるさとして（1981-2 同右）

村松が田代なることをわれ知らず共に物理に入りしころは（1981-3）

村松はわれより先に赤彦に就きわれより先にみまかりにけり（1981-4 同前）

越人の良寛和尚をうやまひて玉島円通寺に墓を設けし（1981-5 同右）

玉島は東国よりは程遠し君がうがらも繁くは来ざらむ（1981-6）

瀬戸の海のどかなれども水島の工業地帯はすぐ鼻のさき（1981-7）

わが友の墓に詣づる望み果し吉備路の秋も少し見むとす（1981-8）

秀吉が水攻めせしと名も高き高松城址小さかりけり（1981-9）

日本一最上稲荷の大鳥居高さ二八メートル(原注これは未完)

(以上入力 2000.07.21 K2)